

講 評

鳩貝太郎



私は、この飼育動物研究会を立ち上げる前の段階に、文科省の科研費をいただきまして、中川先生はじめ獣医師の皆様方と一緒に飼育動物の在り方について調査研究してきました。科研費による調査研究が終わってもこれをさらに推進しなければいけないということで、学校飼育動物研究会を立ち上げて、現在に至っております。その研究会で、私は副会長ということで事務的なことも担当させていただいております。

本日、唐木先生の講演、皆さんの口頭発表やパネル発表、たいへんありがとうございました。これらの実践を皆さんで共有しながら、これからの活動を進めていきたいと思っております。

これから、私の気づいた点をいくつかお話しさせていただきます。

まず、唐木先生のお話ですが、本能の脳、そして理性の脳があるということ、これは非常にわかりやすいお話でした。われわれの行動についてそれぞれが生まれながらのものなのか、環境の影響によるものなのかを考えることのできる、すばらしいお話でした。そして、理性の脳を育てることが、非常に大切なことであるし、理性の脳と本能の脳のバランスをとることが大切であるというお話を伺いました。その時に、動物に愛情を持って育てることがとても有効であるというお話もいただきました。

この講演の後で各発表をお聞きいただきましたが、唐木先生のお話を踏まえて発表が聞けたということは、非常に良かったことだと思います。それぞれの先生方の発表がどういう位置づけなのか、おわかりいただけたのではないかと思います。

私は現在、国立教育施策研究所に勤務しておりますが、ここは、文部科学省の附属の研究所という位置づけになっております。そこでまず、文部科学省側の立場でお話をさせていただきます。

文部科学省としても、生命の尊重ということに対して、非常に重要視しています。教育基本法が改正となりましたが、その中でも「生命尊重」という言葉が出てまいりますし、学校教育法でもその文言が出てまいります。このように、法律に生命の大切さについての文言が入っているのですが、それをどう具体化するかということについては、各学校の取組としてお願いせざるを得ないことです。一律にこうしたらこうなるということは言えません。日本中いろいろな学校があるわけで、都市部の学校もあれば山間部の学校もあります。大規模の学校もあれば少人数の学校もあります。ですから、それぞれの地域、学校の特色に合わせて、子どもたちにとって生命尊重の教育として何が一番必要なことなのか、先生方だけではなくて、地域の方々と相談しながら進めていくということが、必要になります。そのような立場でしか文部科学省として方針を示せないということも事実です。

今、中央教育審議会で、次の教育課程の改訂に向けて議論しているところですが、そこでの基本的な考え方として「言葉と体験の重視」ということがあります。一般的にいわれている「学力」、いわゆる「読み・書き・算術」ということだけではなくて、子どもたちの健全な発達のために、言葉と体験の重視をすることが必要だということですね。生き物を育てるという体験が、命を実感することでもあるし、自分の健康、自分の命、周りの人の命も考えることになっていくのではないかと思います。われわれは動物飼育の体験が重要であるという立場でものを考えていますが、学校にはそうではない立場でものを考えている人たちもいるわけです。学校の現場は、あれもやらなければならない、これもやらなければならないということで多忙を極め、先生方は休む間もないといった現状もあります。ですから、先ほど申しましたように、各学校にとって何がいちばん良いのかということを考えて、教育をしていただくことが基本であると思います。ただ、先ほど、会亀先生のお話の中にもありましたように、学習指導要領生活科の解説の中で、生き物を飼う場合には獣医師さんたちと連携する必要性について触れてありま

す。それから、文部科学省のホームページの中で、学校における飼育動物の望ましい在り方についての研究報告が、掲載されております。そこに、飼育に関するテクニク的なことも含めて書いてあります。このようなものを是非参考にさせていただき飼育動物を教育の中にきちんと位置づけて欲しいと思います。

私ども研究会といたしましても、今日発表いただいたような良い実践をできるだけ多くの方々に伝えたいと思ひまして、会誌や、事例集のようなものをつくっています。このような形で多くの先生方にご理解いただこうと思ひています。

では、具体的に学校でどうすればよいかということになったとき、教育委員会、管理職の考え方が非常に重要になります。ですから、この状況を何とかするためには、研修会を開いて、動物を飼育することの意義をもっともっとわかってもらえるような、そして、適切な飼育ができるような、技能や知識を身につけていただくことが重要だろうと思ひます。これまで、獣医師の方々に非常に協力をしていただいているわけですが、学校の側が、もっと獣医師の方々と連携しながら、このような研修会を進めていく必要もあるし、教育委員会の側が、全員の先生方を対象とした研修会を開いていただく必要もあるかと思ひます。

それから、飼育することになったとき、飼うだけでよいのかということが出てきます。飼育活動をどのように指導に生かしていくかが重要になります。学校教育にはねらいがあるわけで、そのための指導の方法があり、それを評価するということが必要になってきます。ですから、生活科の中でそれを活用する、道徳の授業としてそれを活用する、あるいは理科や総合的な学習の時間、さらには学校全体として活用する方法を考える必要があると思ひます。そのようなことに取り組んでいく場合、一番大事なものは、やはり、発達段階に応じた扱いだと思ひます。幼稚園から小学校中学年くらいまでは、動物から学ぶ、体験的に学ぶということが一番重要であると思ひます。と同時に、

それだけで終わるのではなくて、中学年、高学年からは、動物について、知識として学ぶ、科学的な見方や判断力を身につけていくことが大事であろうと思ひます。そのようなプログラムを学校の中で作っていけるようにしていただきたいと思ひますし、今日の発表の中にもそのような取組がありました。

最後にありました教員養成のことですが、現職の先生方に意識を変えていただいて、技術的なことも含めて研修していただくと同時に、これから教員になっていく方々にも、学生時代からそういうことを学んでいただきたい、教員養成学部の中できちんと位置づけて指導していただきたいと思ひます。後藤先生が発表されたような教員養成学部での取組はまだ一部で行われているだけです。確かに、単位数としても少なく、多くのことを盛り込むことは不可能です。しかし、だからといってやらなくても良いのか、どこに妥協点を見いだすのか、何ができるのかということを考えていかなければならないと思ひます。ですから、理想を追求するとともに、現実の中で何ができるのかを考えることが、小学校の段階でも教員養成の段階でも必要なことだと思ひます。それぞれの場の中でできる範囲で頑張っていく、それをみんなで支援し合う、そしてその成果を交流し合う、そのことが必要なのではないかと思ひます。

本日のような大会をこれからも続けながら、お互いに連携をとって頑張っていけたらと思ひております。これからも、このような活動を学校で続けていただきたい、そして、生き物の大切さをわかっていたいただきたいと思ひます。学校から生き物がなくなって、そして無菌状態になってしまったら本来の学校ではなくなってしまふということを、われわれは認識する必要があるのではないかと思ひます。

本日はどうもありがとうございました。

(国立教育政策研究所総括研究官)

